

# 子育て世代の地域コミュニティへの意識

木 村 文 香\*

## 要 約

要約 本研究では、流山市をフィールドとして、子育て世代が地域コミュニティに対してどのような意識を持ち、どのように参与しているのかを検討した。その結果 i) 現在子育て中の住民と、子育ての終わった住民や子どものいない住民とは、参加している地域のイベントが異なっていること、ii) 子どものいない住民よりも、子どもが独立している住民、未就学児から中学生の子どもを育てている住民の方が、市の出来事に関心を持っていること、iii) 流山市の住民のクオリティオブライフは、子育ての有無とは関連性が低いということ、の3つの知見が得られた。また、地域コミュニティの形成に関しては、子どものいない住民よりも、子どもが独立している住民、子どもが未就学の住民の方が、密な付き合いをしていることが示された。

**Keywords**：子育て世代、地域コミュニティ、クオリティオブライフ

## 問 題

本研究は、子育て世代が地域コミュニティに対して、どのような意識をもち、どのように参与しているのかということ、千葉県流山市をフィールドとして検討するものである。本研究においてフィールドとした流山市は、「都心から一番近い森の街」を謳い、都市開発を行っている。流山市で進められている都市開発事業には、鉄道の新線の開通も含まれてきた。つまり、急速なスピードで都市部からの人口の流入も伴う、都市開発事業を行ってきたということができよう。都市社会学の視点からは、このような都市化は、それまでの「村落」に見られた地域住民の相互扶助のシステムの弱体化を招いたといわれており（白神，2001）、高度経済成長の頃から進んでいる都市的生活様式の深化は、子ども達の生活にも影響を及ぼしていることが指摘されている（増山，1997）。また、

主体性をもった地域コミュニティは、活性化された地域コミュニティの形成につながる。都市化の進む現代社会において、地域コミュニティの形成は、持続可能な住みやすいまちづくりを促進するためには、必要であると指摘されている（奥田，1993）。本研究のフィールドである流山市は、このような地域コミュニティの形成が必要とされている地域ともいえる。そこで、子ども達にとっても、持続可能な住みやすいまちづくりを促進するためにも、弱体化した地域住民の相互扶助のシステムを再構築し、生活機能を維持することが必要だということができる。

子ども達の社会に現在生じている大きな問題として、学力低下、不登校をはじめとする学校不適応の問題が指摘されている（e.g., 伊藤，2007；北区教育委員会，2006）。このような、子どもの問題行動の解決策、対応策は色々な方面から考えられているが（e.g., 弘中，1999；吉田，1997）、地域コミュニティとの連携をもつことによる支援が有効であることも指摘され（酒井，2007）、「コミュニティスクール」の動きが既にみられている（生涯体験活動振興協会コミュニティ・スクール

2008年11月28日受付

\* 江戸川大学 人間心理学科専任講師 学校臨床心理学、社会心理学

研究委員会, 2004)。子ども達が, 地域支援ネットワークのもつ有効性を最大限に生かすためには, 地域コミュニティが形成されており, 親をはじめとする家族が, その地域コミュニティへに参加していることが必要ではなかろうか。実際, Klein (1968) は, コミュニティの遂行する機能の一つとして, 「新しい入来者 (例えば子どもや移民など) を教育し, その行動様式を変容させること」を挙げている。つまり, 子育てそのものを, 地域コミュニティの機能の1つとして位置づけることができるのである。実際, 行政機関が中心となって子育てをネットワーク化する動きは, 1990年代からみられており, この子育てネットワークを地域コミュニティに組み込もうとする動きも, 既に始まっている (白神, 2001)。また, 地域コミュニティの再構築, および成熟によって, 学校, 家庭の機能不全の状態による心理社会的な問題の解決につなげる方略も, 既に考えられつつある (安藤, 2001)。しかし, 本来は, 問題を解決し, ストレスを軽減すべき役割を担う地域コミュニティが, ストレッサーとなることも指摘されており (山本, 1989), 負の側面もあることが明らかにされている。

そこで, 本研究では, 子育て世代による居住地域のコミュニティへの意識と参与の実態を明らかにすることを目的とした調査研究を実施した。この際, 地域コミュニティへの満足度の指標として, クオリティオブライフ (以下, QOL と表記) を取り上げる。これは, 人と環境との適合度を考え, その適合度を高めるために個人の側のみならず, 環境の側への介入を目標としているコミュニティ心理学 (Murrell, S. A., 1973; 山本, 1986) の立場から, QOL 貢献モデルが提出されていることによる (Murrell, S. A. & Norris, F. H., 1983)。QOL 貢献モデルの基本的な考え方は, 「地域生活環境システムは, 住民の生活の質 (QOL) を高めるために住民の様々な生活領域から発するニーズにかなうような社会資源を適正は位置する場」というものである (山本, 1989)。

なお, 本研究は, 「流山コミュニティモデルの構築と大学の役割」研究プロジェクトの一環とし

て行われているものである。本研究で用いた質問紙は「みどりのまちづくりに関する住民意向調査」であり, この調査は, 研究プロジェクトの遂行にあたり, 流山市に暮らす住民の実態を把握すべく実施した, いわば「導入部」ともいえるべき基礎研究との位置づけである。

## 方 法

### 手 続 き

本調査は, 郵送法による質問紙調査として実施した。

質問紙郵送の際には, 流山市による挨拶文を同封し, 調査主体が流山市都市整備部まちづくり推進課と江戸川大学の両方であることを明記し, 調査への協力を依頼した。また, 各家庭への郵送の際には流山市の封筒を用い, 返送用封筒として江戸川大学の封筒を同封した。

調査対象者のサンプリングには, 層化二段無作為抽出法を用いた。流山市を, 隣接する中学校区



図1 流山市地域区分図  
(「あっとタウンコミュニティ——流山データベース——」  
(2002 流山市地域区分)より転載)

2つを1つの地域として「北部」,「中部」,「南部」,「東部」の4地域に分け(図1参照),各地域から,人口比率に合わせて選挙人名簿より抽出した。流山市の地域区分は,流山市立中学校区を基準にしており,流山市による「第2次総合5か年計画」で1981年に定められ,2000年度から始まった流山市基本構想(～2002年)においても,継続して採用されている地域区分である。

なお,選挙人名簿からの住所の書写作业は流山市役所内の所定の場所で行い,一覧表の保管には十分注意をはらい,個人情報の保護につとめた。

### 調査時期

2008年4月下旬から5月上旬に実施した。

### 調査対象

2008年3月下旬の時点で,選挙人名簿に名前が記載されている流山市民1602名。回収された質問紙は512名分であり(回収率31.15%),有効回答数は498名であった(男性202名,女性296名)。詳細は,表1参照のこと。なお,表1では有効回答数が499となっているが,性別が不明だっ

たため,その後削除し,498を有効回答数とした。

### 質問紙の構成

デモグラフィック要因として,性別,年齢,職業,結婚歴,家族構成,居住形態,居住年数,世帯収入,出身地,一緒に生活する「子ども」の有無を尋ねた。他に尋ねた項目は,以下のものであった。

### 地域コミュニティに関する質問項目

i) 地域行事への参加, ii) 地域への関心, 意識, iii) QOL (Greenley, J. R., *et al.* 1997 より翻訳したものを使用)。

## 結果と考察

### 流山市における子育て世代の内訳

調査対象者を「子どもはいない」「独立した子どものみ(家を出た,もしくは学校を終えた)」、「高校以上の学校に通っている子どもが最年少」、「中学校に通っている子どもが最年少」、「小学校に通っている子どもが最年少」、「未就学の子どもの最年少」の6群に分けたところ,地区ごとの内

表1 質問紙の配布数と返送数,及び回収率

	人	口	比 率 (%)	配 布 数	返 送 数 (無効数)	有効回答数	回収率 (%)
北 部	31,976		25.28	404	125 ( 2)	123	30.45
中 部	25,552		20.20	323	111 ( 4)	107	33.13
南 部	39,436		31.18	500	150 ( 4)	146	29.20
東 部	29,533		23.35	375	126 ( 3)	123	32.80
	126,497		100.00	1602	512 (13)	499	31.15

表2 地区ごとの子育て世代の内訳

	子どもは いない	独立した 子のみ	高校以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少
北 部 (n=121)	25.6	36.4	9.9	5.8	6.6	15.7
中 部 (n=108)	25.0	43.5	11.1	1.9	5.6	13.0
南 部 (n=146)	25.3	32.2	13.7	5.5	5.5	17.8
東 部 (n=122)	26.2	36.9	13.1	1.6	3.3	18.9
合 計 (n=497)	25.6	36.8	12.1	3.8	5.2	16.5

訳は下記の表2のようになった。 $\chi^2$ 乗検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった ( $\chi^2=10.868$ ,  $df=(15, 1)$ )。この結果から、地区による子育て世代の分布には、違いがないことが示されたといえる。

### 地域コミュニティに関する質問項目の結果

地域コミュニティに関しては、i) 地域行事への

参加, ii) 地域への関心, 意識, iii) QOL を尋ねた。

### 地域行事への参加

特に学校関連の行事と行政主体のイベント、地域の神社での祭礼への参加に絞って尋ねたところ、表3のような結果となった。育てている子どもの世代による差があるかどうか、 $\chi^2$ 乗検定を行って検討したところ、「流山市民祭り」、「学校公開

表3 地域行事への参加

(%)

	子どもは いない	独立した 子のみ	高校生が 最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少
流山市民まつり	20.2	38.2	15.4	4.5	6.4	15.4
流山花火大会	24.8	37.1	14.3	4.4	5.4	13.9
おすわさま大祭	22.2	43.2	6.2	6.2	4.9	17.3
学校公開(小学校)	11.9	27.1	22.0	10.2	11.9	16.9
学校公開(中学校)	2.7	32.4	29.7	16.2	10.8	8.1
近所の小学校で 行われるイベント	13.3	31.7	18.3	9.2	9.2	18.3
近所の中学校で 行われるイベント	14.9	32.4	23.0	10.8	8.1	10.8

表4 住みやすさ —「あなたがお住まいの地域は住みやすいところですか。それとも住みにくいところですか」—

	子どもなし	独立した子 のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	全 体
度 数	123	182	58	19	26	81	489
平 均 値	2.34	2.36	2.36	2.53	2.31	2.35	2.36
標 準 偏 差	0.885	0.891	0.931	0.772	0.549	0.809	0.859

註：「非常に住みよい」を1点、「まあ住みよい」を2点、「普通」を3点、「やや住みにくい」を4点、「非常に住みにくい」を5点とした。

表5 市の出来事への関心 —「あなたは、流山市のできごとや動きにどの程度関心を持っていますか」—

	子どもなし	独立した子 のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	全 体
度 数	123	182	57	19	26	82	489
平 均 値	2.28	1.98	2.02	1.79	1.88	2.02	2.06
標 準 偏 差	0.752	0.566	0.481	0.535	0.431	0.608	0.623

註：「非常に関心がある」を1点、「ある程度関心がある」を2点、「あまり関心がない」を3点、「まったく関心がない」を4点とした。

表6 近所づきあい —「あなたは近所とどのようなお付き合いをしていますか」—

	子どもなし	独立した子 のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	全 体
度 数	123	182	57	19	26	81	488
平 均 値	2.58	2.04	2.26	2.16	2.19	2.02	2.21
標 準 偏 差	0.789	0.782	0.745	0.765	0.801	0.741	0.802

註：「留守を頼んだり親しく話をする」を1点、「時々立ち話をする程度」を2点、「顔が合えば挨拶をする程度」を3点、「ほとんどつきあいがいい」を4点とした。

(小学校)」、「学校公開(中学校)」、「近所の中学校で行われるイベント」、「近所の小学校において行われるイベント」において有意な違いが見られた(順に、 $\chi^2=14.28$ ,  $\chi^2=24.78$ ,  $\chi^2=38.72$ ,  $\chi^2=32.73$ ,  $\chi^2=36.94$ , 全て  $df=(5, 1)$ )。

### 地域への関心, 意識

①現在の住まいの住みやすさ(5件法), ②市の出来事への関心(4件法), ③近所づきあい(4件法)の3項目を尋ねた。これらの結果は, 表4

から6に示した。また, これらの項目について, 育てている子どもの世代による差があるかどうか, 一元配置分散分析を行って検討したところ, ①  $F=1.174$ ,  $df=(5, 483)$ ,  $p<.97$ , ②  $F=5.274$ ,  $df=(5, 483)$ ,  $p<.00$ , ③  $F=8.341$ ,  $df=(5, 483)$ ,  $p<.00$  となり, 「市の出来事への関心」と「近所づきあい」において有意差があることが示された。これら2項目について多重比較を行ったところ, 表7, 8のようになった。子どもがいない住民よりも, 子どもが独立している住民, 中学生がいる

表7 「市の出来事への関心」多重比較

(I)	(J)	平均値の差 (I-J)	有意確率
子どもなし	独立した子のみ	.307(*)	0.000
	高校生以上が最年少	0.267	0.071
	中学生が最年少	.495(*)	0.014
	小学生が最年少	.400(*)	0.030
	未就学が最年少	.260(*)	0.034
独立した子のみ	子どもなし	-.307(*)	0.000
	高校生以上が最年少	-.040	0.998
	中学生が最年少	0.189	0.795
	小学生が最年少	0.093	0.978
	未就学が最年少	-.046	0.993
最年少の高校生以上が	子どもなし	-.267	0.071
	独立した子のみ	0.040	0.998
	中学生が最年少	0.228	0.720
	小学生が最年少	0.133	0.941
	未就学が最年少	-.007	1.000
中学生が最年少	子どもなし	-.495(*)	0.014
	独立した子のみ	-.189	0.795
	高校生以上が最年少	-.228	0.720
	小学生が最年少	-.095	0.996
	未就学が最年少	-.235	0.656
小学生が最年少	子どもなし	-.400(*)	0.030
	独立した子のみ	-.093	0.978
	高校生以上が最年少	-.133	0.941
	中学生が最年少	0.095	0.996
	未就学が最年少	-.140	0.912
未就学が最年少	子どもなし	-.260(*)	0.034
	独立した子のみ	0.046	0.993
	高校生以上が最年少	0.007	1.000
	小学生が最年少	0.235	0.656
	未就学が最年少	0.140	0.912

表8 「近所づきあい」多重比較

(I)	(J)	平均値の差 (I-J)	有意確率
子どもなし	独立した子のみ	.539(*)	0.000
	高校生以上が最年少	0.314	0.116
	中学生が最年少	0.419	0.240
	小学生が最年少	0.385	0.194
	未就学が最年少	.553(*)	0.000
独立した子のみ	子どもなし	-.539(*)	0.000
	高校生以上が最年少	-.225	0.395
	中学生が最年少	-.119	0.988
	小学生が最年少	-.154	0.933
	未就学が最年少	0.014	1.000
最年少の高校生以上が	子どもなし	-.314	0.116
	独立した子のみ	0.225	0.395
	中学生が最年少	0.105	0.996
	小学生が最年少	0.071	0.999
	未就学が最年少	0.238	0.477
中学生が最年少	子どもなし	-.419	0.240
	独立した子のみ	0.119	0.988
	高校生以上が最年少	-.105	0.996
	小学生が最年少	-.034	1.000
	未就学が最年少	0.133	0.985
小学生が最年少	子どもなし	-.385	0.194
	独立した子のみ	0.154	0.933
	高校生以上が最年少	-.071	0.999
	中学生が最年少	0.034	1.000
	未就学が最年少	0.168	0.930
未就学が最年少	子どもなし	-.553(*)	0.000
	独立した子のみ	-.014	1.000
	高校生以上が最年少	-.238	0.477
	小学生が最年少	-.133	0.985
	未就学が最年少	-.168	0.930

表9 QOL尺度の因子分析結果

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	共通性
Family ( $\alpha=.862$ )							
QOL_私の家族の絆(きずな)は、強い	<b>0.902</b>	0.227	0.324	0.251	0.152	0.258	0.836
QOL_私の家族は、家庭生活に満足している	<b>0.789</b>	0.284	0.367	0.398	0.275	0.315	0.637
QOL_私の家庭は私にとって、心がなごむ場所である	<b>0.785</b>	0.264	0.355	0.271	0.266	0.278	0.619
Social Life ( $\alpha=.774$ )							
QOL_私には多くの良き友人がいる	0.259	<b>0.906</b>	0.229	0.121	0.113	0.257	0.832
QOL_私の交友関係は、自分の人生にとって有意義である	0.240	<b>0.743</b>	0.138	0.155	0.202	0.279	0.562
QOL_私は、友人と自由時間を過ごすことが多い	0.155	<b>0.685</b>	0.123	0.120	0.154	0.301	0.484
QOL_私は、できる範囲で人の役に立ちたいと思う	0.353	<b>0.419</b>	0.252	0.159	0.059	0.132	0.252
QOL(逆転済)_私は、一人で自由時間を過ごすことが多い	0.055	<b>0.237</b>	0.060	(0.178)	(0.211)	0.184	0.178
Living Situation ( $\alpha=.795$ )							
QOL_現在、自分が住んでいる住宅(建物自体)に満足している	0.256	0.119	<b>0.784</b>	0.330	0.170	0.203	0.641
QOL_私は、現在住んでいる家にこれからも住み続けたいと思う	0.305	0.222	<b>0.735</b>	0.296	0.247	0.240	0.545
QOL_現在、自分が住んでいる住宅で十分に個人的プライバシーが守られている	0.341	0.174	<b>0.699</b>	0.311	0.277	0.144	0.495
QOL_自分の家の中で、自分のしたいことが自由にできる	0.397	0.168	<b>0.612</b>	0.313	0.513	0.122	0.496
Finances ( $\alpha=.822$ )							
QOL_私は(自分の家族も含む)、経済的に裕福だと思う	0.260	0.132	0.305	<b>0.892</b>	0.287	0.181	0.808
QOL_私は(自分の家族も含む)、余暇に十分お金を使うことができる	0.356	0.172	0.350	<b>0.743</b>	0.403	0.163	0.569
QOL_私は自分の収入に満足している	0.315	0.178	0.408	<b>0.726</b>	0.273	0.212	0.545
Leisure ( $\alpha=.396$ )							
QOL_私には十分に自由になる時間がある	0.190	0.156	0.192	0.363	<b>0.800</b>	0.052	0.656
QOL(逆転済)_仕事や家事が忙しくて、リラックスする時間がない	0.139	0.134	0.249	0.191	<b>0.669</b>	0.079	0.463
QOL_私は自由時間を有効に使って人生を満喫している	0.363	0.323	0.363	0.349	<b>0.562</b>	0.389	0.442
QOL_テレビやラジオで楽しむことが多い	-0.005	-0.128	0.000	-0.016	<b>0.171</b>	-0.068	0.063
Health ( $\alpha=.623$ )							
QOL_私は、自分と同年齢の人たち以上の体力がある	0.255	0.269	0.198	0.119	0.067	<b>0.889</b>	0.800
QOL_私は、健康に自信がある	0.255	0.282	0.188	0.206	0.108	<b>0.641</b>	0.418
QOL_もし私が病気になっても、近所に良いお医者さんが居るので安心だ	0.218	0.162	0.261	0.297	0.123	<b>0.318</b>	0.167
累 積 寄 与 率	22.594	31.557	37.805	42.966	47.999	52.308	



表 10 QOL 得点 (155 点満点)

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	1.27
平 均 値	106.62	104.87	108.67	106.34	109.41	105.81	104.69	
標 準 偏 差	14.50	14.53	14.92	13.59	13.83	11.89	15.07	n. s.

表 11 QOL (original) Family

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	1.02
平 均 値	3.89	3.78	3.95	3.82	3.96	4.10	3.95	
標 準 偏 差	0.82	0.89	0.79	0.74	0.81	0.63	0.89	n. s.

表 12 QOL (original) SocialLife

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	1.09
平 均 値	3.57	3.57	3.66	3.44	3.59	3.56	3.48	
標 準 偏 差	0.72	0.69	0.69	0.65	0.85	0.81	0.83	n. s.

表 13 QOL (original) LivingSituation

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	1.20
平 均 値	3.62	3.62	3.72	3.53	3.63	3.32	3.55	
標 準 偏 差	0.84	0.89	0.84	0.79	0.84	0.90	0.73	n. s.

表 14 QOL (original) Finances

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	0.75
平 均 値	2.84	2.84	2.84	2.99	2.98	2.86	2.66	
標 準 偏 差	0.96	0.94	0.99	0.86	1.16	0.89	0.99	n. s.

表 15 QOL (original) Leisure

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	1.72
平 均 値	3.17	3.21	3.21	3.17	3.22	3.13	3.02	
標 準 偏 差	0.44	0.45	0.41	0.39	0.55	0.44	0.51	n. s.

表 16 QOL (original) Health

	全 体	子どもなし	独立した 子のみ	高校生以上 が最年少	中学生が 最年少	小学生が 最年少	未就学が 最年少	F 値
度 数	415.00	115.00	146.00	58.00	17.00	21.00	58.00	3.15**
平 均 値	3.06	2.88	3.05	3.25	3.39	3.29	3.03	
標 準 偏 差	0.75	0.77	0.72	0.74	1.02	0.38	0.73	

註: \*\*  $p < .01$

住民、小学生がいる住民、未就学児がいる住民の方が、市の出来事に関心を持っていることが示された。しかし、高校生をもつ住民との間には有意差は示されなかった。近所づきあいについては、子どものいない住民と比べ、子どもが独立している住民、子どもが未就学の住民の方が、密なつきあいをしていることが示された。

### クオリティオブライフ

QOLについては、5件法で、「まったくそう思う」を5点、「まったくそう思わない」を1点としてQOL得点を算出した（最小値＝31点，最大値＝155点）。その後、主因子法バリマックス回転による因子分析を行ったところ、表9のような結果となり、6因子に分かれた。因子はi) Family, ii) Social Life, iii) Living Situation, iv) Finances, v) Leisure, vi) Healthであった。このような因子構造は、尺度開発のために行われた先行研究（Greenley, 1997）と同じ因子構造であり、信頼性、妥当性共に高いことがわかる。これらの因子をもとに、因子ごとに合計得点を算出したところ、表10から16のような結果が得られた。これらの結果について、育てている子どもの世代による差があるかどうか、一元配置分散分析を行って検討したところ、QOLのうちHealth因子において有意差が見られた。この因子について多重比較を行ったところ、表17のようになった。この結果によると、「子どもなし」の住民よりも、高校生以上の子どもが最年少の住民よりも、Health因子の得点が低いことがわかる。

### ま と め

子育て世代における地域コミュニティへの意識について、3つの知見が得られた。1つめは、地域のイベントへの参加は、学校関連のイベントにおいては、子育て中の住民の方が、子育ての終わった住民や子どものいない住民よりも参加しているものの、地域の神社の祭礼や市民まつりについては、子育て中の住民の方が参加していないということが示唆された。2つめは、高校生以上の子育て

表 17 QOL (original) Health の多重比較

(I)	(J)	平均値の差 (I-J)	有意確率
子どもなし	独立した子のみ	-0.166	0.463
	高校生以上が最年少	-.363(*)	0.029
	中学生が最年少	-0.508	0.088
	小学生が最年少	-0.402	0.199
	未就学が最年少	-0.150	0.803
独立した子のみ	子どもなし	0.166	0.463
	高校生以上が最年少	-0.197	0.520
	中学生が最年少	-0.342	0.462
	小学生が最年少	-0.235	0.747
	未就学が最年少	0.016	1.000
最年少 高校生以上が	子どもなし	.363(*)	0.029
	独立した子のみ	0.197	0.520
	中学生が最年少	-0.145	0.980
	小学生が最年少	-0.039	1.000
	未就学が最年少	0.213	0.631
中学生が最年少	子どもなし	0.508	0.088
	独立した子のみ	0.342	0.462
	高校生以上が最年少	0.145	0.980
	小学生が最年少	0.106	0.998
	未就学が最年少	0.358	0.495
小学生が最年少	子どもなし	0.402	0.199
	独立した子のみ	0.235	0.747
	高校生以上が最年少	0.039	1.000
	中学生が最年少	-0.106	0.998
	未就学が最年少	0.251	0.764
未就学が最年少	子どもなし	0.150	0.803
	独立した子のみ	-0.016	1.000
	高校生以上が最年少	-0.213	0.631
	小学生が最年少	-0.358	0.495
	未就学が最年少	-0.251	0.764

てをしている住民は、他の年齢層の子どものいる住民と、異なる意識、行動パターンをもっていることが推測されるということである。子どもがいない住民や子育ての終了している住民の特性が近そうだ。子どものいない住民よりも、子どもが独立している住民、未就学児から中学生の子どもを育てている住民の方が、市の出来事に関心を持っていることが示され、高校生をもつ住民の間には有意差が示されなかったが、これは、通学範囲が広がることにより、市よりもさらに広い範囲の



出来事に関心を持つようになってきているということが考えられる。3つめに、QOLについての結果を見ると、健康に関する因子において、子どものいない住民よりも、高校生をもつ住民の方が高いという結果が得られているが、他はQOLについては差が見られていない。このことから、流山市の住民のQOLは、子育ての有無とは関連性が低いといえることができる。

地域コミュニティの形成については、「近所づきあい」に関する結果に、特徴が現れている。子どものいない住民よりも、子どもが独立している住民と子どもが未就学の住民の方が、密なつきあいをしていることが示されている。これは、居住年数による影響も推測されるが、家にいる時間の長さによる影響も推測される。しかし、この世代による地域コミュニティ形成の可能性が示唆されたといえよう。

流山市における子育て世代は、特に育てている子どもの年齢層にかかわらず、特に中学生までの子どもを持つ住民については、近い特徴を持っていることが推測される。子どもの年齢よりも、家庭に子どもがいるかどうかの方が、意味を持っているようだ。しかし、社交性やソーシャルスキルなどの性格特性や、地域で過ごす時間が地域コミュニティへの参与の度合いに影響を及ぼしていることが考えられるため、今後は、より詳細に検討を進める必要があると考えられる。

### 参考文献

- 安藤延男 2001 家庭・学校・地域の機能不全を『治す』：教育コミュニティ心理学の視点から（思春期・青年期における心身医学と教育の関わり）心身医学，42（1），55-60。
- あっとタウン コミュニティ——流山データベース—— 2002 流山市地域区分〈[http://www.at-town.com/~town/na/db/database/chiiki\\_kubun.html](http://www.at-town.com/~town/na/db/database/chiiki_kubun.html)〉（2008年12月1日）
- Greenley J. R., Greenberg J. S., & Brown R. 1997 Measuring quality of life: A new and practical survey instrument. *Social work*, 42（3），244-254.
- 弘中正美 1999 不登校問題への対応 小川捷之・村山正治（編）学校の心理臨床 心理臨床の実際 2 東京都 金子書房 pp. 30-71.
- 今城周造 1991 「なぜ人と関わろうとするのか——社会的報酬」大淵憲一（監訳）『対人行動とパーソナリティ』北大路書房 pp. 16-49.（A. H. Buss 1986, *Social behavior and personality Hillsdale*, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.）
- 伊藤茂樹編著 2007 リーディングス 日本の教育と社会 8 いじめ・不登校 日本図書センター
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店.
- 北区教育委員会 2006 北区学力向上検討委員会報告書 北区教育委員会事務局教育改革担当部教育未来館.
- Klein, D. C. 1968 *Community dynamics and mental health*, New York: John Wiley & Sons.
- 増山均 1997 教育と福祉のための子ども観——〈市民としての子ども〉と社会参加 ミネルヴァ書房，p. 194
- Murrell, S. A., 1973 *Community psychology and social systems*. New York; Behavioral Publications.（安藤延男訳 1977 『コミュニティ心理学』，新曜社.）
- Murrell, S. A. & Norris, F. H. 1983 Quality of life as the criterion for need assessment and community psychology. *Journal of community psychology*, 11, 88-97.
- 流山市都市整備部まちづくり推進課 2005 流山グリーンチェーン戦略  
[http://www.city.nagareyama.chiba.jp/section/kouen/gc/gc\\_main.htm](http://www.city.nagareyama.chiba.jp/section/kouen/gc/gc_main.htm)（2008年12月1日）
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討——生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究，43，306-314.
- 奥田道大 1993 現代にとってコミュニティとは何か 奥田道大著『都市型社会のコミュニティ』勁草書房 pp. 1-19.
- 生涯体験活動振興協会コミュニティ・スクール研究委員会 2004 我が国におけるコミュニティ・スクールの現状と課題 調査研究報告 日本教材文化研究財団.
- 酒井朗（研究代表者） 2006 平成15年度—平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）（2）「幼小中の連携教育による児童生徒の問題行動の抑制に関する教育臨床学的研究（課題番号15530539）」研究成果報告書.
- 酒井朗 2007 新しい不登校児支援システムモデルの構築に向けて——公的機関と民間機関との連携を視野に入れたシステム開発——平成18年度児童関連サービス調査研究等事業調査研究 酒井朗（研究代表者）「不登校児支援のための地域連携ネットワーク構築に関する研究」研究成果報告書，pp. 35-38.

- 白神利恵 2001 「子育てネットワーク」から「地域コミュニティ」へ：都市化によるコミュニティ枠組みの変遷と「子育て」を景気とした新しい連帯の創造 大阪女子大学人間関係論集, 18, 113-131.
- 山本和郎 1986 『コミュニティ心理学——地域臨床の理論と実践』東京大学出版会.
- 山本和郎 1989 コミュニティとストレス——地域生

活環境システムの影響——社会心理学研究, 4 (2), 68-77.

- 吉田昭久 1997 学校不適應への対処の方略 臨床心理学研究, 35, 43-55.

(KIMURA, Fumika)